

巻頭言

ウェスレーに学ぶ

島 隆三

巻頭言に個人的なことを記すことをお許し下さい。私のウェスレーへの取り組みは大変遅く、ようやく20年が過ぎたところです。私は1984年から6年程、香港の日本語教会におりました（香港日本基督者会）。ここは超教派の交わりですから、様々な教派の方々が集い、主にあって一つになって礼拝や諸集会を守り、日本人の伝道に努めておりました。私はホーリネス育ちでしたから、自分の信仰以外を語ることはできなかつたのですが、香港日本基督者会設立の精神を大事にして、狭い教派主義に陥らないように、また、信仰的な流れが私たちとは違う人々も違和感を抱かないように努めたつもりでした。そして、1期2年の3期を務め、若い方々も多くなりましたので、一応自分たちの務めは果たしたと判断し、帰国することにいたしました。

ところが、私たちが香港にいる間に、日本基督教団ホーリネスの群は危機的なところを通らされました。1969年以來のいわゆる教団紛争の中で、教団も長い間苦しい戦いを強いられましたが、私たちのホーリネスの群も教団の中でどのような道を行くかで意見が分かれ、議論に議論を重ねても一致をみることができず意見の隔たりは大きくなり、1988年春にはついに分離のやむなきに至りました。特に、私たちの東京聖書学校は教師陣も二つに割れ、存立の危機に立たされました。結局、群も学校も二つに分かれてそれぞれの信ずる道を進もうということになりましたが、海外にいた私たちは帰る家を失ったような心境でした。それでも私たちを迎えてくれる教会がありましたので感謝して招聘に応じ、そこに身を置いて、東京聖書学校の再建にも努めて欲しいという群からの要望を受けました。さて、自分などに何ができるだろうかと訝っていたとき、

舎監から「ウェスレーをやってくれないか」という一言があり、身に余ることでしたが他に適当な人がなければやらざるを得ないということで引き受けたのが帰国した 1990 年の春でした。以来、遅い目覚めではありましたが、学生と共に少しずつウェスレーを学びながら今日に至った次第であります。

さて、ウェスレーを担当すると言っても、教科書を何にしようかと思索していた時にタイミング良く 1990 年秋に格好の本が出版されました。当時、新進気鋭のウェスレー学者、藤本満師の『ウェスレーの神学』でした。この本に接した時、大きな感動を覚えました。もちろん日本語でも野呂芳男師の定評のある『ウェスレーの生涯と神学』、また同師の翻訳になるリントシュトレームの『ウェスレーと聖化』等もすでに出版されていましたが、私たちの学校には今一つの感があり躊躇していたときに、藤本師の本に接して「これだ」と思いました。以来、何度も繰り返してこの書に学び、読み返すたびに新しく教えられるところがあります。私ばかりでなく、学生たちもこの書に負うところは大きかったと思います。本が出版された時、著者はまだ若干 33 歳の若さで、日本のキリスト教界にも恵まれた資質を与えられた人はいるのだと感じ入ったことを今もよく覚えています。以来、同師を群のセミナーの講師として二度も迎える事ができ、このウェスレー・メソジスト学会が設立されてからは私もその末席に加えられて、公私ともに大変お世話になって今日に至っております。個人的なことを記して大変恐縮ですが、教団紛争や教会の諸問題に苦闘する一人の牧師が、一冊の本に出会うことによって大変助けられ慰められたという証しとしてお聞きいただければ幸いです。

個人的なことをもう一言つけ加えることをお許し願うならば、私の母教会は札幌新生教会で今日はウェスレアン・ホーリネス教団に所属しますが、昨年は創立百周年の記念の年でありました。この教会の戦前、戦後の約 30 年を牧会したのが伊藤馨牧師で、今年は伊藤馨師召天 50 年に当たり、2 月には札幌と東京で記念会が行われます。伊藤馨師は小原十三司師らと並んで、戦後のホ群を代表する指導者の一人でした。師が召されたのは私の若い日でしたので、師がどれほどウェスレーについて語ったか記憶が定かではないのですが、ウェスレー自身を語ることはあまりなかったと思います。伊藤師ばかりではなく我らの群

の先輩たちはウェスレーの信仰に立つとはいっても、「基督者の完全」を愛読するくらいで、他にウェスレー自身に学ぶ機会は少なかったのではと推察します。戦後の我らの群の知恵袋の一人は仙台の中島代作牧師で、師が健在の頃は機関誌に盛んにホーリネス信仰、また四重の福音について健筆を振るいました。私も青年時代、5年程師の膝元で薫陶を受けましたが、ウェスレーについて聞くことはあってもウェスレー自身から教えられることは多くはなかったと思います。それは、生意気な言い方をすれば、戦後のホーリネス系諸教会にある程度共通して当てはまることではないかと考えます。但し、イムマヌエルは例外で、「ウェスレー日記」全4巻が山口徳夫師の訳でイムマヌエル綜合伝道団から出版され、また、早くからウェスレーの説教集出版に取り組み、近くは標準説教集3巻もていねいな解説付きで同出版局から出されました。今日は日本語で自由にこれらを読むこともでき、さらに藤本師等のよいテキストも出版されているのですから、私たちも心してウェスレーに学ぶ必要があるのではないかと感じております。今日もウェスレーに対してはなお誤解もありますし、ウェスレーを読まないで批判している人たちも見受ける中で、では私たちはどうかと自問すると、やはり余りにも学ぶところが少なかったと反省させられ、遅ればせながら残る生涯、許される範囲で自ら学びつつ、後輩たちにも呼びかけていきたいと願っております。

ウェスレー自身の若い日の信仰的苦闘と、そこを乗り越えてリバイバルの指導者として立てられてからの歩み、そして、自らの確信に立ちながら他の立場も尊重していく行き方は、今日もエキュメニカル運動、また、超教派運動に大きな示唆を与えていますし、教団の中に留まってホーリネス信仰を証しているようにする私たちの群にとっても、ウェスレーの言葉は確かな指標となると信じております。ウェスレー・メソジスト学会にもさらに期待しながら、この地味な働きを担ってくれる器の起こされることを祈っております。

(日本キリスト教団ホーリネスの群・仙台青葉荘教会牧師)